

「ヒマラヤ学誌」発刊に寄せて
戸部隆吉（京都大学医学部）

京都大学は、1958年のチョゴリザ遠征以来ヒマラヤ各峰の初登頂に成功するとともに、学術研究において数々の業績を残してきた。

これらの知見を集積してゆく過程で、高所の低酸素環境下における人体の生理学的順応の機構を、ヒマラヤをフィールドとして医学的に究明したいという願望が生じてきた。このたび有志が集い、シシャパンマ峰（8027m）に京都大学ヒマラヤ医学学術登山隊を派遣するはこびとなり、私が総隊長を引き受けることとなった。

大気中の酸素濃度は、5000mになると約1/2、8000mの超高所では1/3となる。この種の試みとしては、米国生理学会の主催した American Medical Research Expedition to Everest (AMREE) の貴重な報告がある以外に、未だ解明されていない点が多く残されている。

幸い文部省・厚生省のご理解により研究助成もいただけるようになった。また、京都大学西島安則総長はじめ関係各位の絶大な御支持・御協力をいただき研究計画は順調に進んでいる。

まず急性の低圧実験として、名古屋大学環境医学研究所のご厚意により、平地の低圧実験室内において、各種の生理学的研究を実施した。また京都大学医学部の協力を得て、ポジトロンCTによる脳代謝測定をおこなった。

昨年度は、文部省科学研究費と厚生省科学研究補助金によって、第一次調査隊（松沢哲郎隊長、7名）が1989年4月から6月にかけてムスタグ・アタ峰（7546m）に派遣された。隊員自身が、7546mの登頂のすばらしい体験と共に、その貴重な生理学的所見と血液サンプルを持ち帰った。また、引き続き、1989年8月中旬から9月中旬にかけて、第二次調査隊（松林公蔵隊長、8名）は、ネパール国カトマンズ周辺からヒマラヤ山麓にかけて、高所住民を対象として疫学的調査と人文学的調査をおこない、貴重なデータを集積している。

本誌は、主として両調査隊の研究の一部をとりまとめたものである。周知のように高齢化社会では、脳卒中、心筋梗塞、脳・血管病変が激増し、病後のリハビリテーション等も含め脳・心臓の虚血・低酸素血症に対する対策は緊急な解決を要する重要課題となっている。ヒマラヤという高所は、低酸素症を病態の基盤とする疾病の格好のシミュレーションの場であり、高所の低酸素環境における医学研究はその成果を大きく期待されている分野である。

今回、隊員の熱意によって刊行された「ヒマラヤ学誌」の創刊に敬意を表したい。本誌が、医学をはじめとして広く環境科学の研究を含めた「ヒマラヤ学」の創始に向けた新たな試みの一里塚になることを願うものである。

Map of Himalayan Area

